

エオ・ナビア語の地理的多様性

浅 香 武 和

エオ・ナビア語は、スペインのアストゥリアス自治州最西端で約42,000人が話しているロマンス語の1つである。小論は、エオ・ナビア語の言語学的な区分を検討し、社会言語学研究の調査結果を分析した。また、エオ・ナビア語を取りまく法的状況、教育における状況を考察し、2つの表記法が存在している言語政策を解明した。さらに音声、形態、統語、語彙面における特徴をあげてガリシア語とアストゥリアス語との比較研究を試みた。

キーワード：エオ・ナビア語、ガリシア語、アストゥリアス語、言語正常化法、表記法

はじめに

まずエオ・ナビア語の名称について記したい。この言語は、スペイン北部のアストゥリアス自治州最西端の18市町村で42,000人ほどが話していることばについて用いられた名称である。エオ河とナビア河の間に挟まれた地域の住民を、一般的にエオ・ナビイエゴ(eo-naviego)と呼んでいることから、この名称を使用している。その他にもアストゥリアスのガリシア語とかアストゥル・ガリシア語またはガリシア・アストゥリアス語、さらにファラ(fala・ことば)とも言われている。この地域出身で現在マドリード・コンプルテンセ大学ロマンス語学科教授で言語学者のFrías Condeが好んで使用している呼称である。筆者もFrías Condeに従い、この呼称を本論で使用する。

エオ・ナビア語の言語的特徴は、後で比較するようにガリシア語の特徴を示している。実際、アストゥリアス自治州で使われているガリシア語を

呼ぶためにもエオ・ナビア語という名称を用いるのが適切であると考え。そして、この地域に住む住民はガリシア語を話すアストゥリアス人だと認識している。歴史的には、この地域はかつてのガリシア王国に含まれていて、ローマ時代のコンベントス・ルケンシス（ルーゴ司教区）の社会文化的影響のもとにローマ化されたもので、カストレショ（イベリア半島のローマ時代の遺跡）はその典型的な例である。

2005年9月25日付の『ガリシア・オシェ（今日のガリシア）』紙は、「ガリシア語という呼称は、エオ・ナビア地域ではタブーとされている語である」という見出しを組んでいる。その内容は、アストゥリアス自治州のなかに侵略して、ガリシア語の復活をすすめることはガリシア語の言語的植民地主義だとしている。アストゥリアス州西端の地域で数カ月前に沸き起こった感情は、アストゥリアス語の公用語化を認めない一方で、実際にガリシア語が話されているという事実を認めたくないアカデミア・デ・ラ・ジングア・アストゥリアナの態度に抗議するものであった。こうした植民地主義のエオ・ナビア地域のガリシア語を非難することにたいして、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学ロマンス語学科教授兼ガリシア語研究所員のフェルナンデス・レイは、エオ・ナビア地域に住んでいる反ガリシア主義者の感情の渦は、この隣接する地域におけることばの呼称自体に関係ないと説明している。

1. 言語学上の位置関係

エオ・ナビア語は、アストゥリアス自治州にある3つのことば（アストゥリアス語、ガリシア語、カステイーリャ語）の1つのガリシア語の下位区分と考え、アストゥリアス語ではないということを確認しておきたい。

まず、エオ・ナビア語を分類する4つの見方を考えてみたい。

その1) ガリシア語のブロックの一つとする。

アストゥリアス語の強い影響力も考えてガリシア語に属する。ガリシア語ではなく、ガリシア・アストゥリアス語のなかで独立したひとつの言語とする。この見方は、シェイラ (Xeira) という言語保護団体やアカデミア・デ・ラ・ジングア・アストゥリアナ (Academia de la Llingua Asturiana) によって支持されている。これらの団体が推薦する表記法があるが、これはアストゥリアス語に近い形態を示している。

その2) ガリシア語領域の一部とする。

ガリシア政府の関連機関が示すところによると、エオ・ナビア語は、ガリシア自治州の外にあってガリシア語の変種「外のガリシア語」だとする見方である。つまりエオ・ナビア語の表記は、共通ガリシア語の下位区分であることを提示している。この見方を擁護する団体はガリシア国民主義者や MDGA (アストゥリアスのガリシア語擁護委員会), CCV (コタレロ・バジェドール作家協会) がある。表記法と形態の統一を計り、少なくとも共通ガリシア語に近いものを採用している。

その3) アストゥリアス語である。

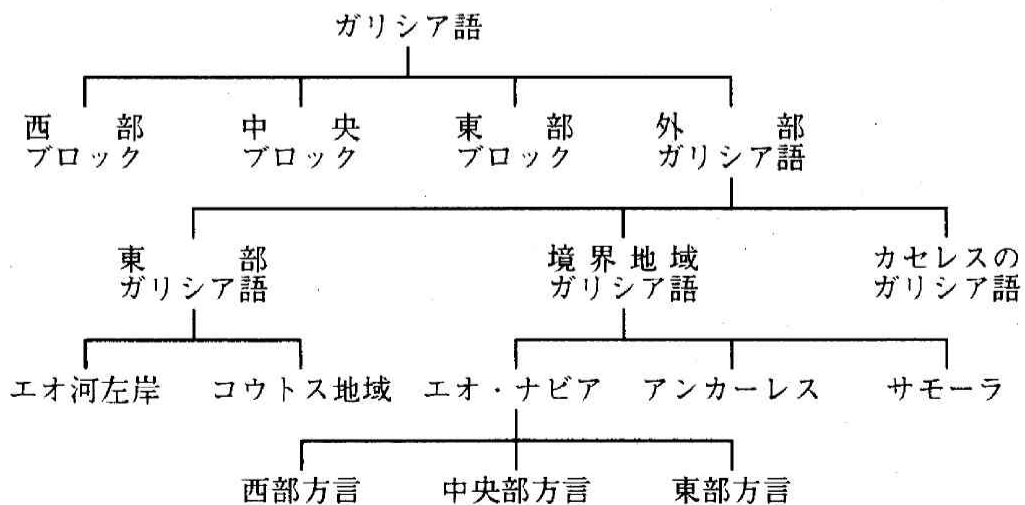
アストゥリアスの左翼国民主義者 (Andecha Astur) の組織が掲げているが、学問的な論証はない。この団体は、エオ・ナビア地域はオーレオ (高床式穀倉), ガイタ (バクパイプ), シドラ (りんご酒) の醸造などの文化的な要素はガリシアの地域とは異なることを上げている。

その4) 東部ガリシア語である。

ガリシア国民主義者たちが上げている考えで、アストゥリアスにおいて公用語と教育を望んでいる。

これら4つの見方は、学問的というより政治的かつ思想的な考えが強く反映しているように見られる。従って、何語なのか論争するよりもこの地域のことばが消滅しないうちに、早急な保護が重要な対策である。

言語学的に上昇二重母音 (-ie-, -ue-) が存在するか否かよりアストゥリアス語とガリシア語の境界線を定めることができるが、いくつかの基準からガリシア語は次のように区分し、エオ・ナビア語はその下位区分にある。区分は、Fernández Rei と Frías Conde の分類に従う。



II. アンケート調査から見たエオ・ナビア語

アカデミア・デ・ラ・ジングア・アストゥリアナが 2003 年に発表した『第 2 回アストゥリアスの社会言語学調査報告書』は、1991 年の第 1 回の調査と比べると興味深い結果を示している。この調査は、アストゥリアス全域で行なわれたものであるが、エオ・ナビア地域だけを見てみることにする。

注目するのは言語のアイデンティティに関するものである。

設問「あなたの話していることば」は何語か。(%)		
	1991	2003
アストゥリアス語(=バブレ語)	8	22
西部アストゥリアス語	40	-
ファラ	27	33
ガリシア・アストゥリアス語	19	24
ガリシア語	-	2
混成語(chapurrado)	-	6
わからない	-	1
地域のことば	-	12

1991 年の調査は、アカデミアのなかにナビア・エオ言語事務局（アカデミアはナビア・エオのように呼んでいる）が創設される以前のものである。さらに 2003 年の報告では、75% がアストゥリアス語とガリシア語の混合したことばと考え、16% がアストゥリアス語の一種、10% はガリシア語の一種だと考えている。すなわちエオ・ナビアの人々の 3 分の 2 は、自分たちの話している言語が何語か判らないという見方をしている。言語上のコンセンサスがないといえる。

日常の言語使用に関して、家族のなかで祖父母は 75% がガリシア語、両親は 60%、両親と子供たちは 50%、子供たち同士は 27% という数値である。ガリシア語の使用度は比較的高いことが分かる。

III. 法的な状況と教育

1) アストゥリアス自治州憲章(1981)

第 10 条 1 項に、バブレ語の保護を謳い、言語上の多様性としてさまざまな変種のなかでバブレ語はアストゥリアス自治州の領域内で使用される、

とある。エオ・ナビア地域はガリシアに隣接する 18 市町村で話される東部ガリシア語の多様性のひとつであるが、バブレ語の名称を、アストゥリアス語の多様性の 1 つとして言及している。公式には、アストゥリアスのガリシア語は存在せず、多様性のみがある。アストゥリアス政府もアカデミア・デ・ラ・ジングア・アストゥリアーナもアストゥリアスの西端の 18 市町村のことばは、ガリシア語の変種であると公式に認めていない。

2) ガリシアにおける言語正常化法 (1983)

この法の第 5 編「外部のガリシア語」第 21 条 2 項は、ガリシア政府はガリシア自治州と隣接する地域で話されるガリシア語の保護の目的で、ガリシア自治州憲章第 35 条であげたことをガリシア政府が施行する、と定めている。

さらにガリシア議会は 1988 年 12 月、カステイーリャ・レオン、アストゥリアスの自治州に行政上組み込まれたガリシア語を話す地域において教育と保護を認めた。同様に、アストゥリアス、レオン、サモーラにおけるガリシア語の保護に関して、ガリシアと接する自治州政府との協力により 1990 年 3 月言語正常化のための連携委員会を組織し、「それぞれの自治州政府と連携してガリシア自治州に隣接する地域で話されるガリシア語の保護」を施行することになった。

1990 年 6 月ガリシア政府とアストゥリアス政府の間で、任意的にガリシア・アストゥリアス語の教育を進める案に調印された。こうしてガリシア政府の協力によりエオ・ナビア地域の初等学校で選択課目としてガリシア語の講座が始まった。

一方、1993 年 12 月アストゥリアス政府教育局は「アストゥリアス語で言いなさい」というアストゥリアス語を使用する普及のキャンペーンを始め、エオ・ナビア地域では「ものの名前を自分のことばで言いなさい」ということに代替され、ガリシア語そして同様にガリシア・アストゥリアス語という曖昧な言い方が排除されている。

1995 年 4 月アストゥリアス政府はアカデミア・デ・ラ・ジングア・アストゥリアーナの憲章を改正した。第 1 条 k の項目は、エオ・ナビアに関するもので「ガリシア・アストゥリアス語またはアストゥル・ガリシア語の言語の変種を促進して見守りましょう」となり、ガリシア語と対立することになった。1996 年夏にはアカデミアのなかにエオ・ナビア言語事務局を開設してさまざまな活動を始めた。アカデミアの公式の見解は、エ

オ・ナビア地域ではガリシア語が話されていることを否定している。前会長のショセ・ジュイス・ガルシアは、ガリシア・アストゥリアス語、ナビアとエオ河の間のアストゥリアスの西部の土地のことば、さらには方言上の連続体、という用語を使用していた。現会長のカノ・ゴンサレスは、アストゥリアス語とガリシア語の特徴を一緒にしたガリシアのルーゴ地域のガリシア語の変種を話している、としているように前会長とは対立的な考えだ。その後、ルーゴのガリシア語の変種について触れずに、移りゆく地域のことばと言及している。最近では、アストゥリアス主義者と同様にガリシア・アストゥリアス語という呼び方を好んでいる。

1998年アストゥリアス政府は、「バブレ語／アストゥリアス語の使用と促進法」を認可し、その第2条にガリシア・アストゥリアス語の規定がある。

バブレ語／アストゥリアス語のために設けられた保護、尊重、監督と進展の規則は、言語的に独自の様態を示す地域のガリシア・アストゥリアス語に特別な調整を通じて広められる。ガリシア・アストゥリアス語は、その地域で保護、尊重、教育、使用、監督に関してアストゥリアス語と同じように取り扱われる。

ガリシア政府は、言語および文化的に脱ガリシア語化をくい止めるためガリシア語を話す若い世代にガリシア語の正常化を訴える目的で1990年コンセージョ・ダ・クルトゥーラ・ガレーガ (Consello da Cultura Galega) を通じて、スペイン教育科学省にこの地域の教育の管轄を持つことを提言した。この提言は難なく受け入れられて、1991年度の新学期から開始された。

レアル・アカデミア・ガレーガ (Real Academia Galega) の2000年2月に改正された憲章第1条には、ガリシア文化の研究、とくにガリシア語の啓蒙、保護、普及が基本的目的である。そして第四条は、ガリシア語は、ガリシアおよびガリシア以外の地域 (アストゥリアス、レオン、サモーラ) でさまざまに話されている、と明言している。

ガリシア以外の地域のガリシア語化について、アカデミアの前会長フェルナンデス・デル・リエゴは、ナビア河とエオ河の間の地域で話される言語の親縁関係について次のように述べている。「方言としてのガリシア語について触れてみる。ガリシア語それ自身は様々な方言的な変種がある。歴史的にガリシアは、ポルトガル北部、サモーラ、ビエルソ、アストゥリア

ス西部に達し、ナビア・エオ地域の場合のように方言的な変種をもつ共通の言葉として生まれた」。

IV. 二つの表記法の存在

1) アストゥリアスのガリシア語の規則

1990年9月MDGA（アストゥリアスのガリシア語擁護委員会）は、『アストゥリアスのガリシア語の表記と形態の規則』を刊行した。その序文には、「ベイガのことば、そしてタピアまたはイビアスのことばの規則が存在しないので、アストゥリアスの共通ガリシア語の規則に定めた。18市町村で実際に話されていることばを最良の方法で採集して標準となるものを求めて、特別な例は犠牲にする必要がある」と示されている。

この規則の編纂には2つの基本原則から出発している。その1. アストゥリアスの最西端のことばは、東部ガリシア語の変種でありアストゥリアス語化したガリシア語でもなくガリシア語化したアストゥリアス語でもない。その2. エオ・ナビア地域のガリシア語に関する規則の対象は、それらガリシア語のさまざまな言語的特徴を尊重しながら常に共通ガリシア語でなければならないとする。

2) ガリシア・アストゥリアス語の規則

1993年アストゥリアス政府言語政策局から刊行された『ガリシア・アストゥリアス語の表記と形態の規則の試案』は、「最も広範囲にわたり使われている形態を収集することに努めた。同時に、現在使われていないけど古い形を回復させた。われわれの言語の特徴を維持するためにも忘れることのできないオリジナルなものです」と示している。さらに、「自分のことばを書こうとする人に言語特徴の事実を示す道具となる。したがって、地域の特徴に率直に、かつ尊敬の念をいただき、さらにガリシア語とアストゥリアス語の規則の形態を考慮している」とある。そして、最終目的は、アストゥリアス語化することであり、脱ガリシア語化することにあるとしている。

2004年9月に *Orientaciois prá normalización lingüística no ámbito municipal*（市町村における言語正常化に関する指導方針）がアストゥリアス政府言語政策局から刊行された。この書はエオ・ナビア地域で議論されている硬口蓋音化（llado-lhado 側面）、yの使用（traballo-trabayu 仕事）、アポストロフィの使用（dun-d'un ひとつの）、過去分詞 -ado で終わる語

尾の俗語用法 (cantado-cantao 歌った) などの言語特徴を掲載している。その思想はガリシア・ポルトガル語を破壊し、非合法的な *fala* という用語を使うことを唱えている。

この2つの規則のそれぞれに従った雑誌や図書が刊行されているが、表記法の統一は進んでいない。エオ・ナビア地域のことばはガリシア語の下位区分にあることをアストゥリアス政府は無視しようとしている。つまり、ガリシア語の枠外でエオ・ナビア地域のことばを勉強させたり標準語化させたりしている。これは、この地域で遺物としてのことばがゆっくりと確実に消滅していく過程で、言語的に興味ある事実に関心するようないものだ。エオ・ナビア地域のガリシア語でもなくアストゥリアス語でもないことばの擁護は、学問的な姿勢というより政治的な力によるものだ。

V. エオ・ナビア語の主要な音声と形態と統語論の面における現象

Babarro (2003) があげているエオ・ナビア語の言語特徴をあげ、さらにガリシア語とアストゥリアス語と比較してみたい。エオ・ナビア語は Frías Conde の分類に従い、西部と中央と東部の3区分にする。(1) で示した形はバリエーションである。

1) ラテン語の母音間の -L-

	エオ・ナビア		ガリシア	アストゥリアス
	西部	中央・東部		
祖父	avó	avolo	avó	güelu
水車	muín	molín	muíño	molín
動物	animais	animales	animais	animales

西部では -L- は脱落、中央・東部は -L- は維持。

2) ラテン語 L-, -LL- の硬口蓋化

	エオ・ナビア		ガリシア	アストゥリアス
	西部	中央・東部		
月	lúa	llúa/lluna	lúa	lluna
月曜	lúis	lluis	luns	llunes
馬	caballo	caballu	cabalo	caballu
乳	leite	lheite/cheite	leite	lleche

ガリシア語とエオ・ナビア語西部は *lúa* 月, のように L-は脱落, アストゥリアス語とエオ・ナビア語中央と東部は *llúa* のように維持されている。

3) ラテン語 PL-, CL- の硬口蓋化音

	エオ・ナビア		ガリシア	アストゥリアス
雨がふる	chover		chover	llover
鍵	chave		chave	llave
平らな	chèn		chan	llenu
呼ぶ	chamar		chamar	llamar

4) ラテン語 -N- の消失か維持

	エオ・ナビア		ガリシア	アストゥリアス
	西部	中央・東部		
平らな	chèn	cheo/chía	chan/chao	llanu
月	<i>lúa</i>	lluna	<i>lúa</i>	lluna

西部では *chèn, lúa* で, ガリシア語は *chan/chao* のバリエントがある。

鼻子音の消失は, 形態面においては大きな特徴を示し, ガリシア語東部ブロックでは名詞複数形 *pantalois* スポン, 動詞活用形 *teis* 持つ, *pois* 置く。アストゥリアス語は *pantalones, tienes, pones* である。

5) ラテン語の強勢のある Ē, Ō

	エオ・ナビア		ガリシア	アストゥリアス
	西部	中央・東部		
石	<i>pèdra</i>	<i>piedra</i>	<i>pedra</i>	<i>piedra</i>
戸	<i>pòrta</i>	<i>puorta/puörta</i>	<i>porta</i>	<i>puerta</i>
新しい	<i>novo</i>	<i>nuovo/nuövo</i>	<i>novo</i>	<i>nuevu</i>

ガリシア語とエオ・ナビア語西部は二重母音が存在せず, アストゥリアス語は二重母音となる。

6) 定冠詞男性形 o/el

	エオ・ナビア		ガリシア	アストゥリアス
	西部	中央・東部		
犬	<i>o can</i>	<i>el can/il can</i>	<i>o can</i>	<i>el perru</i>

日	o día	el día	o día	el día
悪いこと	o peor	el peor	o peor	lo peor
他人	a outra	el otra/l'outra	a outra	l'otra

中性形は el peor/o peor。強勢のある母音ではじまる女性名詞には el が使われる；el otra 別, el hucha 斧, el eira 土地。西部では a outra, a hucha, a eira。

7) 不定冠詞女性形と不定語

エオ・ナビア		ガリシア	アストゥリアス
西部	中央・東部		
unha	uha/úa	unha	una
algunha, ninguha	alguha, ninguha	algunha, ningunha	dalguna, nenguna

8) 所有詞（前置形）の男性と女性形

エオ・ナビア		ガリシア	アストゥリアス	
西部	中央・東部			
私の	meu-mía	mieu/miou-mía	meu-miña	el mio-la mio
君の	teu-túa	tou-túa	teu-túa	el to-la to
彼の	seu-súa	sou-súa	seu-súa	el so-la so

9) 弱形代名詞 lo, la 「それを, 彼を, 彼女を」の形態

東部と中央部で表れる：síntolo 残念に思う, xa lo ves 分かったでしょう。

西部：síntoo, xa o ves.

鼻音のあとでは西部は同化する fálano。中央と東部は fálanno 「それを話す」。

弱形代名詞の位置は地域によりバリエーションがあり, 次のような形式がある。たとえば、「わかりました」は xa el vexo, xa o vexo, véxol, véxoel, véxoo のように表される。

エオ・ナビア語は, 音声と形態面でさまざまな現象を示している。中央部と東部地域はアストゥリアス語に近く, 西部地域はガリシア語に近い特徴を示している。ガリシア語の特徴とアストゥリアス語の特徴を兼ね備えたということができる。それらの特徴は, アストゥリアス西部において,

アストゥリアス語とガリシア語の境界を設定するための基準となるが、等語線は複雑に走り一致するものは少ないと言ってもよい。基本的には3つの言語現象、すなわちラテン語の短い Ē, Ō が二重母音となるか否か、母音間の -N- の消失か維持か、語頭の L- と語中の -LL- の変化により等語線を引くことができる。非二重母音 (pèdra 石, pòrta 戸) と母音間の -n- の消失 (irmán 兄弟, pantalois ズボン) は東部ガリシア語の特徴であり、二重母音 (piedra 石, puerta 戸) と母音間の -n- の維持 (hermanu 兄弟, pantalones スボン, vienes 来る) は西部アストゥリアス語の特徴である。

移り変わることばエオ・ナビア語を考えると、ガリシア語とアストゥリアス語の2つのことばに言語的近似性があると言える。エオ・ナビアの推移地域のひとつは、ガリシア語とアストゥリアス語の言語的特徴に気づいているはずである。

ナビア、ビジャイオンとイビラス、デガーニャの移行する地域の話者は、ガリシア語とアストゥリアス西部 (バルデース, ティネーウ, アジャンデ東部, カンガス・デ・ナルセア, デガーニャ, バルモンテス, ソミイエド, ブラーニャス) で示されるおおくの言語現象がアストゥリアス語またはカステイーリャ語と異なることに違和感を持っているのであろうか。

VI. 語彙の連続性と不連続性

ガリシア語とエオ・ナビア語とアストゥリアス語の3つの言語の間の語彙に関して述べたい。

1) 3つの言語に共通な語彙

	ガリシア	エオ・ナビア	アストゥリアス
茂み	bouza	bouza	boza
首(人間)	colo	colo/collo	cuellu
首(動物)	pescozo	pezcozo	pescuezu
奇癖	zuna	zuna	zuna
忘れる	esquecer	esqueicer	escaecer
温める	quecer	calecer	calecer
卒倒する	esmorecer	esmorecer	esmolecer
ぶつぶつ言う	refugar	refugar	refugayar
昼食	xantar 名詞	xantar/xanta 名詞	xantar/xintar 動詞

続いて	arreo	arreo	xanta/xinta 名詞
その時	daquela	daquella	(d)arrèu daquella

2) ガリシア語とエオ・ナビア語に共通な語彙

	ガリシア	エオ・ナビア	アストゥリアス
ハリエニシダ	toxó	toxu	árgoma/xeito/xeitu
焼く	aburar (queimar)	aburiar	amburar
堆肥	cuito (esterco)	cuito	cucho
施肥する	cuitar (estercar)	cuitar	cuchar
犁	freita	freita	frecha

3) 3つの言語に類似している語彙

	ガリシア	エオ・ナビア	アストゥリアス
水曜	mércores	mèrcores	miércoles
金曜	venres	vènres	viernes
猪	xabaryl (porco bravo)	xabaryl (cocho bravo)	xabalín (gochu montés)
分ける	xebrar	xebrar	(di)xebrar

4) ガリシア語とエオ・ナビア語に共通で、アストゥリアス語が異なる語彙

	ガリシア	エオ・ナビア	アストゥリアス
李スモモ	ameixa	ameixa	nisu
トネリコ	freixo	freisno	fresnu
リンゴの木	maceira	maceiro	mazaneru/pumar
閉める	pechar	pechar	pesllar
黄桃	pexego/péxego	pésigo	piescu

5) アストゥリアス語の特徴を示す語彙

ガリシア語とエオ・ナビア語には存在しない。その意味をガリシア語で

は次のように表す。

	ガリシア	アストゥリアス
静かな	calmo	sele
助け	axuda	andecha
容器	vaixela	cacia
大驚嘆	medo grande	llercía/llerza
秋	outono	seronda
ハリエニシダ	toxo	árgoma
予感する	presentir	albidrar/(en)camentar
集める	coller	algamar
暗くなる	escurecer	atapecer
始まる	comezar	entamar
尋ねる	preguntar	entrugar
皮をむく	quitarlle a folla	esbillar
よじ登る	rubir	esguilar

6) アストゥリアス語とエオ・ナビア語に見られる語彙

ガリシア語には見られない。

	ガリシア	エオ・ナビア	アストゥリアス
貂	garduña	fuíña/fuina	h.uína

比喩的に「腹黒い人」を意味する。

おわりに

エオ・ナビア語は急速に後退し、カステイーリャ語化が進み、非合理的なアストゥリアス主義により不安に駆り立てられている。少なくとも、MDGA はアストゥリアス主義の交戦的態度とガリシア政府の無関心にもかかわらず、この地域の言語問題について取り組んでいる。そしてアストゥリアス政府が毅然とした態度で公用語と規定することを筆者は望んでいる。すでにユネスコの「口承伝承および無形遺産に関する委員会」に、この地域の口承伝承文学が無形遺産となるための手続きはスペインとポルトガルの両政府により提出されている。2005年11月に世界無形遺産として決定される可能性は高い。

「地域言語及び少数言語の欧州憲章」第7条に明記されている原則に、

行政機関は地域言語及び少数言語の普及を妨げてはならない、とあるめように、エオ・ナビア語をこの憲章の第7条に適用して、アストゥリアス自治州憲章にエオ・ナビア語が公用語であることを明記することである。ガリシア政府とアカデミア・ガレーガはスペイン政府に公式にガリシア以外のガリシア語の公用性を申請することである。何よりもまず、アストゥリアス政府が認めている「アストゥリアス語／バブレ語使用促進法」は、エオ・ナビア語（アストゥリアス政府の言うガリシア・アストゥリアス語）をアストゥリアス語と同等の扱いをすべきである、と考える。そのためには公用語としてアストゥリアス語の正常化が先決である。

参考文献

- Academia de la Llingua Asturiana (2003): *Entrambasaugas*. A Revista del Navia-Eo, 19.
- Babarro González, X. (2003): *Galego de Asturias. I, II*. A Coruña.
- Fernández Braña, B. et al.(1990): *Normas ortográficas e morfolóxicas del galego de Asturias*. MDGA. Eilao.
- Fernández Rei, F. (2003): “Galego de Asturias: delimitación sociolingüística,” *Bimienariodel Eo*, 1–8.
- Fernández Rei, F. (ed.) (1994): *Lingua e cultura galega de Asturias*. Xerais, Vigo.
- Fernández Vior, J. A. (1998): *Vocabulario da Veiga*. Uviéu.
- Frías Conde, X. (2003): *Gramática eonaviega*. LANUA. Revista Philologica Romanica.
- Frías Conde, X. (2000): “Relatório sobre a Língua Galega nas Astúrias. Aproximação Lingüística e Literária,” *AGALIA* 63–64, 109–138.
- García, X. Ll. (1997): “El continuum llingüísticu ente'l gallegu y l'asturianu,” *Lletres Asturianas* 62, 43–50.
- Llera Ramo, F. J.(2003): *II Estudio sociolingüístico de Asturias 2002*. Uviéu.
- Meilán García, A. X. (2001): “Aspectos diacrónicos e sincrónicos do galego de Asturias,” *Filoloxía Asturiana* I, 131–153.